



「上演台本公開について」

僕はオリジナル作品をやる場合、クレジットには常に「構成・演出」と入れてきた。それは、僕のオリジナルは、ベースにあるテキストのサンプリングやリライトを基本としているからだ。

さらに、稽古の過程でキャストやスタッフが出したアイデアを、かなりの分量で取り入れているからである。

今回ベースとなるテキストは、「ディック全般」であって特定の作品ではない。

そして直接的な引用もほとんどないのだが、やはり「構成」であるとの意識は強い。

観客のみなさんには、役者のアドリブ部分などが一番わかりやすいと思うが、実は舞台美術、照明、音響、そして演出部のアイデアが、作品に奥行きと広がりを与えている。

また、僕は自分のことを作家ではないと考えているので、上演台本はあくまで設計図のようなもので、読み物としてのレベルには達していないとも感じている。

今回公開する「クラウド」の上演台本は、セリフの順番などは公演時のものに直してあるが、基本的には僕が最初に示す「設計図」レベルのものである。

それを公開するのは、ネットの「可能性」に参加したいからである。

以前、僕が演出した、篠井英介さん主演の『欲望という名の電車』の舞台写真をネット上で見て、わざわざチェコから英介さんと僕に会いに来てくれた研究者がいた。

上演台本を公開することで、いろいろなことが起こると面白いと思う。

上演はもちろん、小説に書いてみたり、外国語に翻訳したり、新たな脚本が書かれたり、「音楽」というところに具体的な曲を作ってみたり……夢は広がる。

もちろん、なかなかいろいろ起こることが起こるとは思えないが、少なくとも公演をご覧いただいた方々が、これを読んでさらなるご自分の「物語」を広げる助けになれば、それはそれでうれしいことである。

これをネタにしばらく話が弾んだりしていただけたら何よりである。

「上演希望の方々へ」

もし、この上演台本を元に実際に上演を考えられる方がいらっしゃる場合は、自由にテキストを行っていただいて構いません。

僕は個人で活動していて、事務所のような受け皿がないので、僕への連絡は Twitter の @suzukatz か @ogawacloud へ「上演したい」とかつぶやいていただければ、フォローをしたのち DM で連絡を取ることもできます。

もしくは、はつなの「suzukatz-cloud」

<http://d.hatena.ne.jp/suzukatzcloud/>

のコメント欄でも書き込んでいただけると助かります。

『CLOUD』

「登場人物」

オガワ || 田口トモロヲ
エンドウ || 鈴木浩介
ウサミ || 山岸門人
イタバシ || 栗根まこと
アマリ || 伊藤ヨタロウ

#プロローグ

完全円形の舞台。

外周の扉から、円形部分へ2本の花道が繋がっている。

舞台面は黒。

ボックス型のオブジェが3つある。

センターのボックスはやや大きく、中央にコネクターが出っ張っている。

円周に近い方の2つのボックスから、ケーブルが出ている。

ウォーホルの「クラウド」を思わせる、ヘリウムガスが入れられた様々なゴミ袋が、舞台上を漂っている。

巨大な障害物のように見える。

舞台の円形部分がコンピュータの端末の象徴になっている。

開演時間間近になると、アマリが現れ、ゴミ袋を宙に投げてまわる。

ゴミ袋が客席にも漂う。

アマリが去ると、スタッフゴミ袋を元のように舞台上に集める。

客入れの音楽が終わわり、街ノイズが大きくなる。

暗転。

街ノイズ、カットアウト。

一瞬の静寂。

音楽。

円形部分と花道の境界に、男が立っている。

オガワである。

オガワ、首からセンスカムをぶら下げ、上空を見上げている。

反対側の花道に、男が立っている。

エンドウである。

エンドウ、オガワを見つめている。

さらに、客席扉から、イタバシとウサミが現れる。

イタバシとウサミも上空を見上げている。
オガワ、センターボックスに立つ。
アマリ、花道から現れ、全体を見ている。
イタバシとウサミ、ゴミ袋を扉の外へ運び出す。
エンドウとアマリが、円形の外周をゆっくりと回る。
劇場の外周の壁に、端末の画面の象徴として文字のインスタレーション（雲を思わせる象徴的な照明でもよい）が映し出される。
流れる文字（もしくは雲）の中心で立ち尽くすオガワ。
上空からやや太いケーブルが下りてくる。
オガワ、ケーブルを両手で受け止め、センターボックスのコネクターに接続し、床に落ちていたケーブルの先端を拾い上げる。
音楽、カットアウト。

1

オガワ、ケーブルを握り続けている。
エンドウ、外周の壁を見回しながら、端末の画面を読み上げる。

エンドウ「朝。トースト、ソーセージ2本、アメリカンレリッシュ&タバスコ、ラズベリージャム、有機豆乳、野菜ジュース、エスプレッソ。
昼。焼きおにぎり（冷凍）、コロッケ（冷凍）、サンペレグリノ。
夜。ポトフ、パン、バター、エスプレッソ。ポトフなんか作れるんですか？」
オガワ「肉と野菜にブイヨン入れて煮込むだけだから」
エンドウ「料理するんだ？」
オガワ「簡単にできるものだけ」
エンドウ「コンビニですませてるのかと思った」
オガワ「駅まで行かなくちゃならない」
エンドウ「自転車なら十五分くらいじゃないですか」
オガワ「帰りは？あの坂上ること考えたら」
エンドウ「運動になる」
オガワ「運動は嫌いだ」
エンドウ「え？健康オタクじゃないんですか？」
オガワ「べつに」
エンドウ「じゃあ、これは？」

エンドウ、再び端末の画面を見る。

エンドウ「体重、60.2kg。体脂肪率、15.7%。毎日つけてるんですけど」
オガワ「ただの記録」
エンドウ「でも、健康に関心がないと普通じゃないと思っけどな」

オガワ 「……」

エンドウ 「クレストール5ミリグラム。クレストール？」

オガワ 「薬」

エンドウ 「クスリ？ドラッグ？」

オガワ 「まさか」

エンドウ 「じゃあ何のクスリ？」

オガワ 「コレステロール」

エンドウ 「コレステロール高いんですか？ぜんぜんメタボでもないのに」

オガワ 「遺伝らしい」

エンドウ 「ああ、なるほど」

オガワ 「自覚症状はまったくないんだけど、もう二十年以上飲んでる」

エンドウ 「飲まないとうつなるんです？」

オガワ 「血管がつまって、脳梗塞とか脳卒中とか」

エンドウ 「コワイなあ」

オガワ 「あくまで可能性が高くなるってだけだから」

エンドウ 「でも、毎日体重や体脂肪計ってるの、コワイからじゃないんですか？」

オガワ 「べつに……ただ、毎日記録すると、太ったりするのは抑えられるけど」

エンドウ 「記録するだけで？」

オガワ 「普通、変化に気がつけば修正するもんだろ」

エンドウ 「そうかなあ」

オガワ 「実際、僕は二十年以上体重がほとんど変わってない」

エンドウ 「まさか」

オガワ 「ほんとだって。エンドウくんもやってみればわかる」

エンドウ 「続かないな、多分」

オガワ 「どうして？習慣化しちゃうば、大した手間じゃない」

エンドウ 「習慣化ね……そうやって毎日同じこと繰り返すのって面白いかな」

オガワ 「面白いかどうかはわからないけど、ラクだとは思っ。日常のほとんどの場面で、考えたり決断する必要がなくなる。決めるのって一番面倒でしょ」

エンドウ 「ああ、それなら少しわかります。特に食べたいものがないのに、何食べる？とか何食べたい？とか聞かれると困るなあ」

オガワ 「だから、あらかじめ週単位でも月単位でも献立を決めておいて、それにのってて食事をすれば、何食べるかとかで悩むこともなくなる」

エンドウ 「たしかに、決めてよ、って言われるのが一番イヤかもしれない。なんでオレが？って思うもんな、いつも」

オガワ 「誰かにそんなこと言われるの？」

エンドウ 「ええ、まあ」

オガワ 「彼女？」

エンドウ 「いえ」

オガワ 「じゃあ、奥さん？」

エンドウ 「ええ」

オガワ 「結婚してるの？」
エンドウ 「一応」
オガワ 「へえ、そうなんだ。そりゃ大変だね」
エンドウ 「オガワさんは？」
オガワ 「してた」
エンドウ 「じゃあ今は」
オガワ 「別れた」

オガワ、ケーブルを床に落とす。

外周の映像が消える。

エンドウ 「ふうん……そういう場合どうなるんです？」
オガワ 「どうなるって？」

エンドウ 「オガワさんの人生の登場人物として奥さんの記録は残すんですか？それとも、ライフログから奥さんは削除しちゃいました？」

オガワ 「どうかな」

エンドウ 「どうかって」

オガワ 「いいじゃない、そんなこと」

エンドウ 「知りたいな」

オガワ 「どうして？」

エンドウ 「興味あるんですよ、オガワさんの人生に」

オガワ 「あのね、僕はきみがライフログのやりかたを教えてほしいっていうから、こっつしてるだけで……」

エンドウ 「わかってます。でも、オガワさんの人生、ちょっと面白そうで」

オガワ 「面白いことなんか何もないでしょ」

エンドウ 「そんなことないですよ。それに、人間は誰だって、他人が何してるかが気になるもんだし」

オガワ 「のぞき見趣味か」

エンドウ 「のぞかれるのも嫌いじゃないんだと思いますけどね。じゃなきゃ、こんなに多くの人が、クラウドにライフログをため込んだりしないでしょ」

オガワ 「ブログとライフログは根本的にちがう。エンドウくんは、それを混同してるんじゃないかな」

エンドウ 「どういうことですか？」

オガワ 「僕はライフロガーであって、ライフロガーではないんだ」

エンドウ 「どう違うんです？」

オガワ 「(ライフロガーは、自分の日々の行いを他人に閲覧してもらつためにウェブ上にアップする。でも)僕たちライフロガーに読者はいらぬ。自分のためだけにやっている。(だから手間をかけて文章を考えたり、YouTubeにクリップを送ったりしない)」

エンドウ 「はあ……」

オガワ 『ライフログのすすめ』を書いたゴードン・ベルも、(自分の日々の行いを他人に閲覧してもらったためにウェブ上にアップするのはやめたほうがいいと忠告してるし、)度を過ぎた公開は愚かだとも言っている。僕もそれには同意する」

エンドウ 「……」

オガワ 「いったんウェブ上に出してしまえば、コピーは簡単。で、それを取り戻すことなんかできない。もし、エンドウくんが世界中と何もかも共有したいと心底から思うなら、やればいい。きみの権利なんだから。でも、僕は絶対にそんなことは薦めない」

エンドウ 「でも、オガワさんはそのライフログをクラウドに残してるんですよね」

オガワ 「ああ」

エンドウ 「つまり、ウェブ上にあるわけでしょ」

オガワ 「そうだね」

エンドウ 「じゃあ、積極的に公開しようが、個人の利用にとどめようが、のぞかれる危険はあるわけですよね」

オガワ 「Gメールと同じようにね。いくら非公開にしても、グーグルの人間なら見放題だな」

エンドウ 「じゃあ、やっぱりのぞかれる前提はあるわけじゃないですか」

オガワ 「まあ、そこは最初の心理的ハードルだとも言える」

エンドウ 「オガワさんはどうやってそこを乗り越えたんです?」

オガワ 「乗り越えてなんかいない」

エンドウ 「じゃあ?」

オガワ 「僕は自分が重要な人間じゃない、ということに自覚的だったってことだよ」

エンドウ 「え?」

オガワ 「僕の情報なんて、誰も積極的にのぞきたいとは思わない」

エンドウ 「そうかな?」

オガワ 「そうだよ」

エンドウ 「じゃあ、もし興味を持たれることがなかったとしても、悪用される可能性はありますよね」

オガワ 「悪用って?べつにライフログに貯金してるわけじゃない」

エンドウ 「だけど、オガワさんになりすまして、何か犯罪を犯すとか……狙われるとか

……」

オガワ 「それはフィッシング詐欺や『オレオレ詐欺』よりも確率は低いだろっね」

エンドウ 「どうして?」

オガワ 「狙われるには、狙われるだけの理由が必要なんだ。人間は無作為に選んだ相手に悪意を向けることはできない」

エンドウ 「通り魔とか無差別テロとか……」

オガワ 「通り魔も無差別テロも、きちんと目標を定めてるじゃない」

エンドウ 「それは……あ、ヘンリー・ルーカスって殺人鬼、知ってます?」

オガワ 「ああ、映画にもなったよね」

エンドウ「ああ、やっぱり知ってるんだ、あんなマニアックな映画！」

オガワ「1989年、ジョン・マクノートン監督で、カルト好きにはマストだよな。『羊たちの沈黙』なんて目じゃない！」

エンドウ「ヘンリーは日常でイヤなことがあると、関係の無い人を殺して憂さ晴らしをしてたじゃないですか。ああいうのはどうです？」

オガワ「憂さ晴らしは困るよな」

エンドウ「ほら」

オガワ「でも、その憂さ晴らしに出会う確率は、限りなくゼロだよ」

エンドウ「でも、ゼロではないわけでしょ」

オガワ「科学的には、ゼロと見なしていいような値だ」

エンドウ「だけど、ゼロじゃないんだから……」

オガワ「ヘンリーの被害者は多く見積もっても400人くらい。70億人の中の

400人だよ(0.0000006742857)。それも特定の地域の外側にいたら、まったく関係ない。街を歩いていて交通事故に遭う確率の方がよっぽど高い」

エンドウ「……」

オガワ「そんなことで悩むなら、ライフログはやらないほうがいいね」

エンドウ「わかりました……それで、ライフログは、もう現在までコンプリートできてるんですか？」

オガワ「いや」

エンドウ「でも、昨日のことはもう記録済みですよ」

オガワ「ああ。だけど、まだ完全に記録できたわけじゃない。現在とライフログの最新部分の間には空白がある」

エンドウ「生まれたところから順番にやってるんですか？」

オガワ「一応」

エンドウ「律儀な性格出てますねえ。オレだったら、よく覚えてるところとか、いい思い出からやると思うな」

オガワ「でも、記憶はわりと時間軸に沿ってまとまっているから、順番にやったほうがいい出しやすいんだよ」

エンドウ「そうですかね？」

オガワ「(正確な口時は覚えてなくても)(二つの出来事があったとき、どっちが先だったとか)というのは、結構覚えてるでしょ」

エンドウ「ああ、そうかもしれませんね。あれより前で、これより後だったとかってことは、思い出しやすいかもしれません。どうしてだろう？」

オガワ「それは、記憶はカッコに入っているからだという仮説がある」

エンドウ「カッコ？」

オガワ「そう、人間の脳は、時期とか時代とかをカッコで括って、記憶をまとめていくよつなんだ」

エンドウ「なるほど。小学校のときなのか、中学のときなのかって分けただけで、ものすごくハッキリしますもんね」

オガワ「そう。だから、過去から順番にやって、抜け落ちたところを修正して、って

形でやってるんだ」

エンドウ「へえ……それで、今のくらいまで来たんです？」

オガワ「どのくらいって？」

エンドウ「ライフログは何歳くらいまでできたんです？」

オガワ「37歳」

エンドウ「オレと同じ年だ！」

オガワ「そう」

エンドウ「やっぱりなあ」

オガワ「え？」

エンドウ「どんな37歳だったか、見せてもらえませんか？」

オガワ「ダメ」

エンドウ「どうしても？」

オガワ「ダメ」

エンドウ「でも、他人に見せないなら、わざわざクラウドなんかに貯めこまないで自分の端末のハードディスクに保存しておけばいいんじゃないですかね」

オガワ「それこそ、端末を空き巣に持って行かれたらおしまいだ」

エンドウ「バックアップを作っておけば……」

オガワ「バックアップなんか関係ない。誰かの手にハードディスクがわたったら、それでおしまい。クラウドの方がよっぽど安全だよ」

エンドウ「そうなのかもしれないけど、実感しにくいなあ」

オガワ「実感というよりは、理解の範疇だよ」

エンドウ「理解ね……」

オガワ「そう。それに、自分の頭の中とクラウドがあれば無限を手に入れることができる」

エンドウ「無限？」

オガワ「人生もハードディスクも有限だけど、クラウドは無限だ。つまり、永遠に生き続けられる」

エンドウ「データとしてってことですよね。肉体は滅びるんだから」

オガワ「人間の存在は結局はデータでしかないだろ」

エンドウ「なるほど」

オガワ「ライフログに記録するということは、歴史を捏造することだ。超個人的、超主観的歴史の記述。個人が全体で、全体が個人になる」

エンドウ「他人は必要ないってことですか？」

オガワ「必要ないね」

エンドウ「クラウドそのものが消えたら？」

オガワ「そんな事態になるってことは人類滅亡のときだ。種の滅びだよ。むしろ大歓迎。開放のときさ」

エンドウ「ますます興味が湧いてきました」

オガワ「それはよかった」

オガワ、センスカムをエンドウへ向ける。
エンドウ、ポーズを取る。

エンドウ「それ、自動的に撮影してくれるんですね」

オガワ「うん。30秒に一度」

エンドウ「そんなに頻繁に」

オガワ「内蔵メモリが1ギガあって、3万枚くらい撮れる。10日はラクにいける」

エンドウ「見るの大変でしょう」

オガワ「そうでもないよ、ほとんど似たような画像だし、スイッチ切ってる時間の方が長いから、さっさと流していけば、1日5分位で終わる」

エンドウ「へえ」

オガワ「これが面白いのは、加速度センサ、光センサ、赤外線センサが内蔵されていて、違う環境に入ったり、近くに人が現れたりすると、30秒の間隔に関係なく自動的に撮影してくれるんだ」

エンドウ「シャッターチャンス逃すなんてことはないってことですね」

オガワ「そう」

エンドウ「オレの写真も相当あるんだろうな」

オガワ「あるね」

エンドウ「肖像権とかある人がいた場合はどうするんです？」

オガワ「僕は公開を目的としてないから。それに、もし撮影規制があるなら、スイッチを切る」

エンドウ「なるほど。お値段は？」

オガワ「500ポンドだったから、7万4〜5千円くらいかな」

エンドウ「思ったより安いんですね」

オガワ「高いか安いかは関係ない。必要か必要じゃないかだと思っな、こういうものは」

エンドウ「ライフロガー以外の人にどういうニーズがあるんです？」

オガワ「認知症患者には不可欠なものになると思っな。すでにこれを使用することによって、患者の長期記憶を補完する働きがあることが報告されてる」

エンドウ「でも、街中で一般人がみんなそれを首から下げてたら不気味ですよ」

オガワ「そうかな？」

エンドウ「なんか、おたがいにおたがいを監視してるようで」

オガワ「正しく生きていれば何の問題もない」

エンドウ「難しいな。オガワさんは正しく生きてるわけですか？」

オガワ「いや、ムリだ。だから、スイッチを切る」

二人、笑う。

ストロボが数回点滅する。

オガワ「誰か来た」

エンドウ「今のストロボ、玄関チャイムのかわりですか？」
オガワ「きつと宅配便だ。僕は食べ物や日用品は全部ネットで買ってるから」
エンドウ「そうですか」
オガワ「毎週、月曜日に届けてもらってる。運ぶの手伝ってくれるかな。結構あるんだ」
エンドウ「いいですよ」

オガワ、花道へ去る。

エンドウ、あとを追う。

音楽。

2

花道のない扉から、イタバシが現れる。

イタバシ、スマートフォンを操作している。

ウサミ、コンビニ袋を持って、イタバシの現れた扉の反対側の扉から現れる。

音楽が消える。

遠くに大型車の通過音が聞こえる。

イタバシ『拡散希望。先程市内でひったくりがありました。何か微々たる情報があれば連絡下さい』……市内でどこの市内だよ。アホかこいつ。『何か微々たる情報があれば』って日本語か！言葉の使い方知らないなら書くな！アホ！」

イタバシ、スマートフォンを操作しながら、舞台上を歩く。

ウサミ、舞台へ上がって、コンビニで買ってきたものを食べる。

イタバシ『拡散希望。愛媛県東予地方にお住まいの方で、銀の首輪をした若いオスのアビシニアンな迷い猫に心当たりのある方、当方で保護しております。心当たりのある方は当方まで。』……若いオスのアビシニアンな迷いネコ？アビシニアンな迷いネコ！デマ以前！バカばかりか！」

ウサミ「アビシニアンって、ネコの種類ですよ」

イタバシ「知ってるよ。1888年のイギリス・アビシニア戦争後、イギリス兵がエジプトのアレクサンドリアの港にいた「ズーラ」という名のメスをイギリスに持ち帰ったのが起源。毛の模様が特徴的で、ティックドタバニーと呼ばれている。瞳はゴールドかグリーン。寿命は12年から15年で、歯肉炎にかかりやすい」

ウサミ「歯肉炎ですか？」

イタバシ「ああ、歯肉炎だ」

ウサミ「歯磨きとかさせたほうがいいんですか？」

イタバシ「無論だ。特に缶詰系のキャットフードを与えている場合は、週に1、2回、

水で少し濡らしたカット綿を指に巻きつけて、歯の外側をこすってやるとい
い」

ウサミ 「外側だけでいいんですか？」

イタバシ 「外側だけで十分だ」

ウサミ 「さすがオヤツさん、何にでも詳しいっすね。東京の地下河川の地図が頭に入
ってる人なんて、オヤツさん以外今まで会ったことありませんよ、オレ。何
の役に立つのかは知らないけど……オヤツさん、なんで刑事なんかになっ
たんです？」

イタバシ 「ウサミ……」

ウサミ 「はい」

イタバシ 「そのオヤツさんっていうの、いい加減にやめてくれないか？」

ウサミ 「どうしてっすか？ 刑事っぼくて、オレ、好きなんすけど」

イタバシ 「こっちは老けこんだ気分になるんだよ」

ウサミ 「でも、オヤツさん、もう50でしょ」

イタバシ 「46だ、46！ 誰が50だ！ 50なんかになったらもう人生終わりだぞ！」

ウサミ 「……相当意識されてるんですね」

イタバシ 「当たり前だ！ オレの人生はこれからだ！ 結婚もまだ諦めてない！」

ウサミ 「え、オヤツさん、離婚されたんですか？」

イタバシ 「誰が？」

ウサミ 「あ、イタバシ、さん」

イタバシ 「オレがどうしたって？」

ウサミ 「離婚されたんですか？」

イタバシ 「離婚？」

ウサミ 「いや、だって結婚もまだ諦めてないって……」

イタバシ 「独身だ、オレは」

ウサミ 「え？」

イタバシ 「結婚は一度もしてない」

ウサミ 「ずっと？」

イタバシ 「ずっと」

ウサミ 「まさか、ホ……なわけないか……」

イタバシ 「え？」

ウサミ 「でも、知らなかったなあ！ オレはてっきり……」

イタバシ 「てっきり、なんだ？」

ウサミ 「いや、その……縁がなかったってことですか？」

イタバシ 「理想が高いんだ」

ウサミ 「わかります」

イタバシ 「……しかし、だんだんそうばかりも言っつられなくなってきた」

ウサミ 「わかります」

イタバシ 「悲しいことだが、年齢とともに理想は下げていかなければならないのが現実
だ」

ウサミ 「ですよね」

イタバシ 「だから、理想の出会いを待っているだけじゃなく、現実的な出会いを求めて行動はしているんだ」

ウサミ 「と言いますと？」

イタバシ 「お見合いサイトに登録している」

ウサミ 「そうですか」

イタバシ 「だが、なかなか成果が得られない」

ウサミ 「どうしてですかね？」

イタバシ 「女子が結婚相手に求めているのは、何はともあれ安定した職業と高額年収だ。

刑事なんて危ない職業は最初から相手にされにくい」

ウサミ 「それは知ってますよ。でも、イタバシさん、それなりに高額所得者じゃないですか」

イタバシ 「どこが？」

ウサミ 「だって、就活のとき警察の給与モデルで見たんですけど、45歳警部補は年収で800万くらいもらえるそうじゃないですか。オレ、それでこの仕事に決めたんですから。800万って十分じゃないんですか？」

イタバシ 「45歳、警部補ならな」

ウサミ 「イタバシさん、46歳なんですよね」

イタバシ 「46歳だ。だが、警部補ではない」

ウサミ 「え？警部補じゃないんですか？」

イタバシ 「巡査長だ……」

ウサミ 「46歳で？」

イタバシ 「おまえにはわからないかもしれないが、『はぐれ刑事』の安浦さんでも巡査長なんだぞ。『太陽にほえる』のボスでようやく警部補。そう簡単に警部補にはなれるもんじゃないんだ。ちなみに、『子亀』の西さんも巡査長だがな」

ウサミ 「七曲書のボスで警部補……あんなに高そうなおスーツ着てるのに……信じられない」

イタバシ 「45歳で警部補なんて、オレたち叩き上げから見たら、超エリートだ」

ウサミ 「だけど、巡査長でも600万くらいは……」

イタバシ 「結婚して子どもが二人くらいいて、その子ども手当ももらって、危険な仕事とかイヤな仕事についてればな」

ウサミ 「爆発物処理とか死体処理とか？」

イタバシ 「ああ」

ウサミ 「ちなみにおいくらくらいなんですか？」

イタバシ 「爆発物が1回5200円」

ウサミ 「えっ？」

イタバシ 「死体処理が1体3200円」

ウサミ 「そんなもんなんですか？」

イタバシ 「刑事手当、いくらか知ってるだろ」

ウサミ 「いくらでしたっけ？」

イタバシ「そんなことも知らないで捜査やってたのか」

ウサミ「細かいことは気にしないたちで……で、いくらなんです？」

イタバシ「1日520円」

ウサミ「！……オレたち520円で殺人犯とか追っかけてたんですか？」

イタバシ「ああ。マカロニもジーパンも、みんな520円で死んでいった」

*アドリブあり。

ウサミ「……転職しようかな」

イタバシ「おまえいくつだ？」

ウサミ「今年で30です」

イタバシ「遅いよ、もう」

ウサミ「そんな……」

イタバシ「オレだって考えなかったわけじゃない。でも、刑事なんて潰しがきかないんだ。肩書き使って再就職できるのは、警備会社くらいだろ。それなら警官続けた方がいい。少なくとも潰れる心配はないからな」

ウサミ「……」

イタバシ「それとも30過ぎて、現在の生活と将来の保証捨ててフリーターになるか？」

ウサミ「それは……」

イタバシ「だけど、地道に刑事続けて、とりあえず巡査長になれば、それなりに貯蓄もできるし、退職金、年金も合わせれば、老後の経済的な心配はかなり緩和される。で、善良な市民の一人として、20年ぐらい暮らせるんだ。あとは、その老後と一緒に過ごしてくれる女（ひと）さえいれば、文句のない人生だった、と言えるとおレは思ってるんだ」

ウサミ「……」

*アドリブあり。

イタバシ、再びスマートフォンを操作する。

イタバシ「『拡散希望。アフィリエイトで高額副収入ゲットの主婦でもできる副業』おい、詐欺だ詐欺！こいつら、いつかまとめて退治してやるからな！……それにしても、ネットってこんなことやるために開発されたんだと思うか？」

ウサミ「さあ……」

イタバシ「くだらん。実にくだらん」

ウサミ「本当にツイッター好きですね。っていつか中毒？ある意味、ドラッグですよ」

イタバシ「だからツイッターやってるだけじゃない」

ウサミ「ほかには？」

イタバシ「チェスとか……」

ウサミ 「ゲームですか。しかも無料の」
イタバシ 「ムダに金は使わない主義なんだ」

ブレーキの音。

ウサミ、ギクツとして周りを見回す。

ウサミ 「でも、まるでゴーストタウンだな、ここ。ほんと気味悪い……」
イタバシ 「ビビってるのか、おまえ？」

ウサミ 「べつにビビってるわけじゃ……オレは警戒してるんです」

イタバシ 「警戒？何を？」

ウサミ 「もちろん犯人をですよ」

イタバシ 「いないよ。逃亡中の犯罪者は、こついうところより街中のほうが隠れやすいんだ」

ウサミ 「でも、わかりませんよ。無人島に逃げてたヤツとかいたじゃないですか」

イタバシ 「仮にいたらいたで、手柄になるんだからいいじゃないか」

ウサミ 「だけど、いきなりでつくわしたら危険じゃないですか。死角もたくさんあるんだし、もうすでに狙われてるかもしれない……」

イタバシ 「銃持ってるんだろ？」

ウサミ 「そりゃ持ってますけど……」

イタバシ 「じゃあ、先に撃っちゃえ」

ウサミ 「撃っちゃえって……」

イタバシ 「オレが正当防衛だったって証言してやる。誰も見てないんだ、まず間違いないから認められる」

ウサミ 「でも、それはマズイでしょ、いくらなんでも」

イタバシ 「バカか、おまえ。相手は殺人犯だぞ。そういうヤツは退治していいんだ」

ウサミ 「逮捕でしょ、退治じゃなくて」

イタバシ 「退治だ。逮捕して裁判やって刑務所入れて何年かしたら出してやる、何年かしたら出ちゃう……善良なる市民のみなさんは、そんなことはお望みではない。殺人犯なんか、発見したら即処刑。それが、善良なる市民のみなさんが本当に望んでることだ。そして、それが正義だ」

ウサミ 「……」

イタバシ 「法の番人である前に、正義の執行者であれ、というのがオレの考え方だ。その点で、オレはアメリカ大統領を支持している」

ウサミ、携帯でメールを見ている。

イタバシ、銃を抜き、銃口をウサミの額へ向ける。

ウサミ、息を飲む。

イタバシ、引き金を引く。

ウサミ、絶叫。

イタバシ「バカ、(弾丸は)入れてないよ」

ウサミ「脅かさないうでくださいよ!」

イタバシ「冗談だ」

ウサミ「冗談……」

イタバシ「笑うところだろ。よっ大統領!オバマ・ビンラディン!とか言って(笑う)」
ウサミ「……一瞬本気で撃たれるのかと思った……実際に撃ったことあるんですか?」

イタバシ「あるわけないだろ」

客席扉が開き、宅配便の配達員が現れ、円形部分の外側を歩く。

アマリである。

アマリ、コンビニ袋を持っている。

イタバシとウサミ、アマリを見つめる。

イタバシ「職質」

ウサミ「オレが、ですか?」

イタバシ「どう見ても犯人じゃない。安心しろ」

ウサミ「でも……」

イタバシ「職質!」

ウサミ「……わかりました」

ウサミ、警察バッジを示しながら、アマリのところへ走る。

ウサミ「すみません!」

アマリ「はい」

ウサミ「警察の者ですが、どちらへ?」

アマリ「配達を終えて、戻るところですが」

ウサミ「配達?この団地には誰も住んでないんじゃないですか?」

アマリ「一人だけいますよ」

ウサミ「いる?どこに?」

アマリ「27号棟の303号室」

ウサミ「名前はわかりますか?」

アマリ「オガワさんです」

ウサミ「何をしてるかたですか?」

アマリ「さあ」

ウサミ「配達したものは?」

アマリ「食料とか水、それに日用品……だと思えます。定期的にお届けしてますけど」

ウサミ「オガワさんの年齢はどれくらいですかね?」

アマリ「50くらいじゃないかな」

ウサミ「そうですか……ほかに誰かいませんか?」

アマリ 「私は玄関で品物渡すだけですから……でも、ほかに誰かいるようには思わなかったけど」

ウサミ 「(写真を取り出す)この男を見かけたことは？」

アマリ 「いえ」

ウサミ 「そうですか……あの、その袋の中身は？」

アマリ 「……CDとかDVDですが」

ウサミ 「拝見できますか？」

アマリ 「え？」

ウサミ 「念のため」

アマリ、しびしび袋をウサミに渡す。

ウサミ、袋の中を検める。

*イタバシとアマリのアドリブあり。

ウサミ 「これDDじゃないですよね？」

アマリ 「DD？」

ウサミ 「デジタルドラッグ」

アマリ 「え？」

ウサミ 「おじさん、DDは違法だっということ知ってますよね」

アマリ 「これ、オレのじゃないんだ」

ウサミ 「どっいうことですか？」

アマリ 「全部、拾った……」

ウサミ 「どこで？」

アマリ 「オガワさんとの、ゴミ置き場……よくCDとかDVD捨ててあるから……ダメですか？」

ウサミ 「まあ、厳密に言えば、マズイですねえ」

アマリ 「どっして？捨ててあるのを拾っただけなのに？」

ウサミ 「場合によっては窃盗にもなります」

アマリ 「勘弁してくださいよ。金持ちの人が捨てたもの貧乏人が拾ってどこが悪いんだ？」

ウサミ 「ああ、今日はいいです。でも、これ(DD)は預からせていただきますよ」

アマリ 「はい……」

ウサミ 「では、ありがとうございました」

アマリ、花道へ去る。

ウサミ 「なんか切ないですねえ。ああいうおじさん見ると」

イタバシ 「同情なんかする必要はない。あの人にはあの人の楽しみもある」

ウサミ 「(DD)を見せ(て)ますっ」

イタバシ「ちょっと行ってみるか。DDなんかどうでもいいが、こんなところにひとり
で残ってるなんてやつは、一応チェックしておく必要があるだろう、今後の
ためにも」

ウサミ「そうですね……でも、珍しいですね、自分から行くこうなんて……」

イタバシ「少しは働かんと申し訳ないからな」

ウサミ「ですね」

イタバシ「それと、もしかしたら……」

ウサミ「え？」

イタバシ「いや、なんでもない」

イタバシとウサミ、客席扉へさる。

デジタルドラッグをイメージした音楽1。

オガワが花道からヘッドフォンを手に現れる。

オガワ、ヘッドフォンをして、センターボックスにすわる。

ストロボが数回点滅する。

オガワ、起き上がる。

イタバシとウサミが現れ、花道の中ほどでオガワと向かい合う。

ウサミ、オガワに警察バッジを提示する。

オガワ、無反応。

イタバシとウサミ、去る。

#3

黒い服に着替えたアマリが反対の花道から現れ、ボックスから伸びているケーブルの
先端を拾い上げ、あたかもマイクのように扱い、舞台上を動きまわる。

オガワ、円形部分に戻り、ボックスから伸びているケーブルの先端を拾い上げる。

音楽が消える。

外周の壁に、チェス盤のような模様が映し出される。

二人は、ネット上のチェスルームで、チャットをしながらプレイしている。

ちなみに、アマリはオガワが対戦相手にアマリのイメージを与えているだけで、実際
はこの誰であるかは不明である。

また二人は、それぞれケーブルをマイクのように扱い、ライブのMCのような感じで
喋る。

アマリ「チェックメイト」

オガワ「……ギブアップ」

アマリ「もう一番いく？」

オガワ「やめる」

アマリ「了解」

オガワ 「チエスの才能ないかな？」
アマリ 「まだ考えながらプレイしている」
オガワ 「どういうこと？」
アマリ 「感じなければダメだ」
オガワ 「どういうこと？」
アマリ 「考えずに感じるだけ」
オガワ 「難しいな」
アマリ 「どうして？」
オガワ 「ただ感じることはできない」
アマリ 「どうして？」
オガワ 「感じるためには知る必要がある」
アマリ 「パス」
オガワ 「だが情報は無限にある」
アマリ 「だから？」
オガワ 「個人の時間は有限だ」
アマリ 「だから？」
オガワ 「知ること、理解することは容易に限界に達する」
アマリ 「自明」

間

オガワ 「なぜ限られた時間しか生きられないのか？」
アマリ 「パス」
オガワ 「自覚もなしに、人生の折り返しをとくに過ぎていた」
アマリ 「2歳なのに人生の折り返しにいた子を知っている」
オガワ 「このままでは生きた証が何も残らない」
アマリ 「生きた証が欲しい？」
オガワ 「欲しい。このまま消え去るのはいやだ」
アマリ 「誰だって、最後には死ぬ。どんな努力も失敗に終わり、死に屈服させられて、それで終わりだ」
オガワ 「ライフログを残せば、オレはクラウドの中で生き続ける。精神生命体になることができる」
アマリ 「ほんとに？」
オガワ 「実際、ライフログを眺めていると、世界が自分のために存在しているように思える」
アマリ 「ほんとに？」
オガワ 「決して消え去ることのない王者の人生を見ているようだ」
アマリ 「本当は、クラウドの中にはキップル（ゴミ）しかないんじゃないのか？」
オガワ 「そんなことはない」
アマリ 「そちらがやっつてるのは、いらぬものをクラウドの中に移す作業に過ぎない」

オガワ 「どうしろと?」
アマリ 「考えるな、感じる」
オガワ 「禅問答?」
アマリ 「パス」
オガワ 「人間やめろってこと?」
アマリ 「人間やめればラクになる」
オガワ 「……考えてみる」
アマリ 「感じる」

間

オガワ 「話を変えよう」
アマリ 「OK」
オガワ 「新しいDDの情報は?」
アマリ 「入ったらすぐ知らせる」
オガワ 「DDは、なぜこんなに安い?」
アマリ 「劣化せずにコピーできるから。音楽も映画も本も、どんどん安くなった」
オガワ 「それ以前に、目的が儲けじゃないように思う」
アマリ 「たとえば?」
オガワ 「イデオロギーとか宗教とか革命とか」
アマリ 「面白い」
オガワ 「価値観が変えられるようだ」
アマリ 「それはよかった」
オガワ 「DDを聞き続ければ、感じられるようになるのか?」
アマリ 「多分」
オガワ 「わかった」

間

アマリ 「デイトレードの情報は何かある?」
オガワ 「ヒューストンのクライオジェニックス、木曜日」
アマリ 「カテゴリーは?」
オガワ 「生物学」
アマリ 「いくら?」
オガワ 「1・5ドル」
アマリ 「方法は?」
オガワ 「スキルピング。数分が勝負」
アマリ 「ありがとう」
オガワ 「PCから目を離すな」
アマリ 「了解」

オガワ 「グッドラック」
アマリ 「やる？」
オガワ 「やらない」
アマリ 「もう金はいらない？」
オガワ 「いらない」
アマリ 「そう」
オガワ 「じゃあ、また」
アマリ 「バイバイ」

オガワとアマリ、ケーブルを床に落とす。

外周の壁の映像が消える。

アマリ、花道へ去る。

デジタルドラッグをイメージした音楽²。

オガワ、ヘッドフォンをしてセンターボックスにすわる。

オガワのシルエットが外周の壁にいくつも映し出される。

4

エンドウ、花道から現れオガワを見つめている。

エンドウ「結婚してすぐに、妻は仕事をやめて専業主婦となった。

僕にはそれだけの収入があったし、彼女を養えることは、自分の力の証明でもあるように感じて、僕もそれを喜んだ。

だが彼女は、それを機に社会活動に参加することをやめた。

生活に必要なものは、すべてネットで買い物をし、届けられた商品はすべて僕が受け取りに出た。

僕がいなくときに配達員が現れると、居留守を使い、僕は再発送の手続きを取らなければならなかった。

僕たちは、結婚の前提として子供は作らないことにしていた。

子供を作れることを前提としないセックスは、夫婦間では必要なものだった。必然的に、僕たちはセックスレスになった。

彼女は、家の中でできる家事に関しては、完璧なまでに熱心だった。

掃除、洗濯、食事……どれも手を抜くことを知らないようだった。

部屋の中はどんだん片付いていた。

子供もペットもないので、日常的なキップル以外、部屋を汚すものもなかった。

そして、三つ星レストランでしか食べられないような料理が食卓に並んだ。

同時に、彼女はヴァーチャルな世界に入り込んでいた。

最初、英語が得意だった彼女は、ネットの翻訳機能を使って各国の言葉で書かれた記事を英語に翻訳して読みまくっていた。

食事のときに、世界で起こっていることを、テレビのニュースなんかとは比べ物にならないほど詳しく教えてくれた。

僕は、どんどんついて行けなくなり、彼女も次第に話すことをやめた。

その分、ネットに費やす時間が増えた。

家事をしている以外は、ネットに接続していた。

僕の妻であるという彼女とは、まったく別人格の誰かがそこにはいた。

違う名前で、顔がない、誰か……

しばらくして、彼女はライフログを始めた。

本や写真、CD、DVDなどを次々とデジタル化し、実物はなんの躊躇もなく捨てた。

「捨てるんじゃないわ、デジタルに保存するのよ」

ますます部屋の中から人の気配が消えていった。

彼女の存在すら、僕には不確かになっていった……

ある日、彼女がめずらしく話しかけてきた。

「もう肉体も必要ないみたい」

「え？」

「向こうで待つてるから……」

そして、彼女は……

オガワ、エンドウの気配に気づき、ヘッドフォンを外す。

外周のシルエットが消える。

音楽も消える。

エンドウ「家の中でもヘッドフォンですか？」

オガワ「ああ、これね……」

エンドウ「ご近所もないんだし、スピーカーから大音量で音楽聴いても、どこからも

苦情は来ないでしょ」

オガワ「まあね。でも、大したスピーカー持ってないから、これのほつが直接脳に響

く感じがするんでね」

エンドウ「もしかして、デジタルドラッグ？」

オガワ「……」

エンドウ「なるほどね。でも、外部の音が聞こえないと不便なことありません」

オガワ「とくには」

エンドウ「でも、さっき誰か訪ねて来たでしょ」

オガワ「玄関チャイムのかわりにストロボが点滅するようにしてあるから」

エンドウ「ああ、そうだった」

オガワ「エンドウくんのところにも来た？」

エンドウ「いえ、うちには……誰だっただんです？」

オガワ「都市開発機構の人だったかな？」

エンドウ「都市開発機構？」

オガワ 「あれ、ちがったかな……ま、とにかくパブリックな肩書きの男が二人来たんだ」

エンドウ「で、そいつらが何か言ってきたんですか？出てけとか？」

オガワ 「なんて言ってたんだっけかな？」

エンドウ「え、忘れちゃったんですか？」

オガワ 「録音してなかったし、すぐにメモ取らなかったから……」

エンドウ「完全に記憶は外部脳に依存してるんですね」

オガワ 「だって……あ、でも写真は撮った。見る？」

エンドウ「でも、写真見ても……」

オガワ 「じゃあ、見ない」

エンドウ「あ、見ます、見ます」

オガワ 「そう」

デジタルノイズが聞こえてくる。

イタバシとウサミが再び花道に現れる。

オガワ 「一人はこいつ。で、もう一人がこっち」

エンドウ「どんな話したか全然覚えてないんですか？」

オガワ 「今、思い出してるところ。ちょっと待って……」

ノイズが消える。

*この後の会話は、オガワの記憶。ところどころにノッキングやスローモーション、逆回転などの手法を用いて、意図的に引っ掛かりを作って行われる。

ウサミ 「なんだ、オガワさん、もう引越しの準備されてるんじゃないですか。僕はてっきり、オガワさんがひとりで立退き反対運動でもなさってるのかと思ってました」

オガワ 「……」

ウサミ 「とんだ取り越し苦労でした。場合によっては、強制執行とかだってあるんですから。行政ともめるのは、いろいろ面倒ですよ」

オガワ 「……」

イタバシ、ヘッドフォンを拾い上げ、耳に当てる。

ウサミ 「ですから、自主的に引っ越していただければ、それに越したことはありません」

オガワ 「……」

ウサミ 「それで、引越しの「予定日」は？」

オガワ 「引越しの準備なんかしてませんよ」

ウサミ 「でも、きれいに片付いてるじゃないですか」

オガワ 「生活に必要な最低限のものしか置かないようにしてるので」
ウサミ 「本とか、CDは？」

オガワ 「すべてデジタル化しました。捨てたわけじゃない」

イタバシ 「オガワさん、ライフログーですか？」

オガワ 「ええ。ご存知ですか？」

イタバシ 「私もクラウド・コンピューティングには興味がありました」

オガワ 「そうですね。では、おわかりでしょう」

イタバシ 「ええ、まあ」

ウサミ 「何ですか、ライフログーって？」

イタバシ 「あとで教えてやる」

オガワ 「あなたもおやりなんですか？」

イタバシ 「いえ、私はまだ」

オガワ 「ぜひ、おやりになるといい。キップルから解放されますよ」

ウサミ 「キップルって？」

オガワ 「ダイレクト・メールとか、からっぽのマッチ箱とか、ガムの包み紙とか、きのこの新聞とか、そういう役に立たないものことです」

イタバシ 「つまり、ゴミのことだ」

ウサミ 「英語？」

イタバシ 「フィリップ・ス・ディックの造語で……」

ウサミ 「フィリップ・ス・ディック？」

イタバシ 「ああ……全部あとで教えてやるから黙ってる」

ウサミ 「はい……」

オガワ 「ディックは読んでおいたほうがいいですよ。彼はある意味で、今日の世界のありかたを予言していたんですから」

イタバシ 「そうですね。トータルリコールって考え方を、当時すでに持っていたわけだし」

ウサミ 「トータルリコール？」

オガワ 「完全なる記憶のことです。つまり、コンピュータを外部脳として考え、人生のすべてをデジタルに記憶するんです」

ウサミ 「はあ……」

イタバシ 「ああ、こいつに説明は無用です。時間の無駄ですから。(ウサミに) だから、黙ってるって言っただろ」

ウサミ 「すみません……」

イタバシとウサミ、先に進めなくなり、同じフレーズをリピートしながら、ぎくしやくとした動きを続ける。

オガワ、それを面白がって見ているが、適当なところで止める。

イタバシ 「センスカムですか、それ？」

オガワ 「そうですね」

イタバシ「30秒に1回シャッター切ってるんですよ」

オガワ「ええ……あ、もし問題があるなら自動撮影解除しますけど」

イタバシ「いえ、構いません。録音もされてる？」

オガワ「いいえ」

イタバシ「映像派と音響派があるとすると、映像派ってことですか」

オガワ「そうかもしれませんね。僕の場合、言葉も視覚要素ですから」

イタバシ「なるほど、たしかにディックっぽい」

オガワ「ディック好きですか？」

イタバシ「若い頃に結構読みました……SF好きだったので」

オガワ「ディックはSFを超えています」

イタバシ「たしかに。彼が未来を使いながら描いたのは、抑圧との戦いですからね」

オガワ「そうです、そうです」

イタバシ「ディックが生きてたら、現在の状況をどう思いますかね？」

オガワ「きつと、当時と同じように悩んでいるでしょうね。こんな抑圧だらけの社会

から逃れたいって……ネットだろうがクラウドだろうが、そんなものではない。社会はなくならない。実際には、社会の抑圧は強まって、個人の孤立化は進んでいるわけですから。ディックはいつの時代に生きてたとしても、孤立して、抑圧を感じて、不満と不安にとりつかれていたでしょうね」

イタバシ「わかります」

オガワ「でも、僕はそんなディックの世界観に共感しています」

イタバシ「なるほど……だから、ここにお一人でいる、というわけでもないですよ」

オガワ「どういうことですか？」

イタバシ「ディックの作品には、誰も住まなくなったアパートメントに一人で暮らしている男、なんてのが似合いますからね」

オガワ「ああ、なるほど。それはそつかもしれない。ここでの暮らしはちょっとディック的だと言えなくもない」

ウサミ「じゃあ、本当に引越しの準備をしているわけじゃないんだ」

オガワ「ええ。ここが気に入ってるんで」

イタバシ「オガワさん、お仕事は何を？」

オガワ「働いてません」

イタバシ「失業中ですか？」

オガワ「いえ、再就職するつもりはないので、失業ではないでしょう。引退のほうが近いかもしれない」

ウサミ「引退？」

オガワ「ええ。証券会社を早期退職して、その退職金でデイトレードをやりました。それがうまくいって、ここでの暮らしを続けるだけなら、多分、もう死ぬまで働く必要はないと思います」

ウサミ「うらやましいなあ……教えてもらえませんか？」

オガワ「いや、それは……」

ウサミ「お願いしますよ」

オガワ 「ですが……」

イタバシ 「ウサミ！」

ウサミ 「……すみません」

イタバシ 「では、金銭的に困っているの、ここに居座ってるわけではないんですね」

オガワ 「はい」

ウサミ 「じゃあ、引越したほうがいいですよ。治安もよくないですから。犯罪者が逃げこむ可能性もありますし」

オガワ 「引越してもいいんですけど、なんかそんな気にならないんですね」

ウサミ 「どうしてです？」

オガワ 「どうしてでしょう？」

ウサミ 「こちらがお聞きしているんですが」

オガワ 「そつだな……僕はここで誰かを待っていないければいけない……いや、ここで待ってる約束をしたのかもしれない」

ウサミ 「はあ？」

オガワ 「とにかく、まだしばらくはここにいます」

ウサミ 「いますって……」(イタバシに向かって、自分の頭を指差し、首を振る)「

イタバシ」(目でウサミを制し)「このままここに居座り続けると、住基カード、公的個人認証カード、社会保障カードなどから、登録された名前を抹消されるかもしれないよ」

オガワ 「どういうことですか？」

イタバシ 「ディック的な言い方をすれば、社会から存在を消されるってことです」

オガワ 「何か買うたびに税金も払ってるのに？それとも脅しですか？」

イタバシ 「脅しじゃありません。社会を必要とするなら、社会のルールに従ったほうがいい、というだけです。私たちはディックと違って現実を生きているんですから」

オガワ 「ああ、なるほど。では、検討します」

イタバシ 「ところで……」(写真を取り出す)「この男に見覚えありませんか？」

オガワ、イタバシから写真を受け取って見る。

デジタルノイズが小さく聞こえてくる。

エンドウ、円形部分に上がってきて、オガワの持っている写真をのぞき込む。

イタバシとウサミは、エンドウの存在をまったく気にしない。

エンドウ、客席通路を通って、扉から去る。

ノイズ、消える。

イタバシ 「いかがですか？」

オガワ 「見たことないですね」

イタバシ 「そうですか……ありがとうございます。お時間を取らせました」

オガワ 「どうしましたまして」

イタバシ 「失礼します」

ウサミ 「失礼します」

イタバシ「(振り返って) ああ、そうだ。デジタルドラッグは二応違法ですから。私たちも目くじらたてて逮捕しようなんて思っはいませんけど、あまり大っぴらには、ね」

オガワ 「……」

イタバシ「いくらディックがジャンキーだったからって、そこまで真似しなくてもいいじゃないですか」

オガワ 「……」

イタバシ「では、お邪魔しました」

イタバシとウサミ、花道へ去る。

オガワ、エンドウを探す。

エンドウの姿は消えている。

音楽。

5

オガワ、ケーブルを拾い上げ、周りを見回す。

オガワ 「誰かいます?」

間

オガワ 「誰かいる?」

間

オガワ 「誰もいない?」

アマリ、花道から現れ、ケーブルを拾い上げボックスにすわる。

アマリ 「今、到着」

オガワ 「よかった」

アマリ 「うまくいった」

オガワ 「ディトレード?」

アマリ 「もちろん」

オガワ 「おめでとう」

アマリ 「いくら勝ったか知りたい?」

オガワ 「べつに」

オガワ、ボックスにすわる。

アマリ 「チエスは？」
オガワ 「今日はやりたくない」
アマリ 「じゃ、すこし話す？」
オガワ 「そちらがよろしければ」
アマリ 「OK」

間

オガワ 「今、どこにいる？」
アマリ 「どこにも」
オガワ 「どこにも？」
アマリ 「でも、あらゆる場所に偏在している」
オガワ 「そう」
アマリ 「考えるな」
オガワ 「感じる」
アマリ 「そう」

間

オガワ 「感じるためには何をすればいい？」
アマリ 「泣いてみたらどうかな？」
オガワ 「泣く？」
アマリ 「そう」
オガワ 「どうやって？」
アマリ 「悲しめばいい」
オガワ 「悲しむことができない」
アマリ 「何も愛していないからだ」
オガワ 「パス」
アマリ 「悲しみは自分自身を解き放つ」
オガワ 「それで？」
アマリ 「悲しみは愛の終局」
オガワ 「それで？」
アマリ 「悲しみとは、自分がひとりきりでいなければならぬ」ことを、身をもって知る」
オガワ 「今、ひとりきりだ」

アマリ 「こつして話しているの」
オガワ 「それは……」
アマリ 「ひとりきりであるという」ことは、生きているものの最終的な運命だから、そ

の先には何も無い、という状態でなければならない」

オガワ 「それは？」

アマリ 「絶対的な沈黙、絶対的な孤独、絶対的な無」

オガワ 「具体的に」

アマリ 「つまり死だ」

アマリ、ケーブルを首に巻きつける。

オガワ 「死……」

アマリ 「そうだ」

オガワ、ケーブルを首に巻きつける。

オガワ 「死ねってこと？」

アマリ 「意識するだけでいい」

オガワ 「それで？」

アマリ 「死を意識できれば、愛することができるようになる」

オガワ 「ほんとに？」

アマリ 「死と愛は同じものの表と裏だから」

オガワ 「ほんとに？」

アマリ 「死への意識が強い人ほど、愛は深い」

オガワ 「そうかもしれない」

アマリ 「ほう、わかるのか」

オガワ 「そういう人を知っていた」

アマリ 「愛していた？」

オガワ 「わからない」

アマリ 「愛することができれば、悲しみもわかる」

オガワ 「ほんとに？」

アマリ 「とにかく愛してみろ」

問

オガワ 「何を愛せばいい？」

アマリ 「何を愛せばいいかわからないのか？」

オガワ 「わからない」

アマリ 「そうか」

オガワ 「教えてほしい。ヒントでもいい」

アマリ 「たとえば……」

アマリ、ケーブルを捨て、花道へ去る。

オガワ、ケーブル持ったまま立ち上がる。
音楽。

オガワ 「たとえば？」

間

オガワ 「たとえば？」

間

オガワ 「誰かいますか？」

間

オガワ 「誰かいる？」

間

オガワ 「誰もいない……」

音楽、大きくなる。

暗転。

6

イタバシ、センターボックスにすわっている。

音楽が消え、遠くに大型車の通過音が聞こえている。

ウサミ、缶コーヒーを持って現れる。

ウサミ 「缶コーヒーを差し出し」どうぞ

イタバシ 「おっ」

イタバシ、缶コーヒーを飲む。

ウサミもセンターボックスにすわって缶コーヒーを飲む。

ウサミ 「あの」

イタバシ 「なんだ？」

ウサミ 「どつしてこのところ毎日、オガワを張ってるんです？」

イタバシ 「ヤツはエンドウを知ってるからだ」

ウサミ 「え？」

イタバシ 「きつと現れる」

ウサミ 「どうしてわかったんです？」

イタバシ 「わかったんじゃない、感じたんだ」

ウサミ 「感じた？」

イタバシ 「そう」

ウサミ 「……エンドウの写真を見たときのオガワを覚えてます？」

イタバシ 「ああ」

ウサミ 「おかしなところありました？」

イタバシ 「とくにおかしなところはなかった」

ウサミ 「ですよね」

イタバシ 「だがな、感じたんだ。こいつはエンドウのことを知ってるってな」

ウサミ 「感じたって……何の根拠もなくですか？」

イタバシ 「根拠はある」

ウサミ 「うかがってもいいですか？」

イタバシ 「オガワとオレの調べたエンドウは、同じ臭いがする」

ウサミ 「臭い？」

イタバシ 「同じ人間の表と裏って言うか……どっちも社会にとつての病原菌だ。そういう臭いがプンプンした。さっさと駆逐したほうがいい」

ウサミ 「でも、イタバシさん、オガワと話が弾んでいたじゃないですか。ディックとかキップルとかライ・フロガーとか」

イタバシ 「ライフロガーだ」

ウサミ 「ライフロ・ガー？」

イタバシ 「ライフロガー」

ウサミ 「ライフロガー？」

イタバシ 「そう」

ウサミ 「コンピュータ用語には弱くて……」

イタバシ 「英語だ」

ウサミ 「え？」

イタバシ 「もついい」

ウサミ 「……」

イタバシ 「とにかく、オガワは犯罪者じゃないかもしれないが、病原菌だ」

ウサミ 「はあ……」

イタバシ 「説明はできない。そんな臭いがする、感じる、それだけだ」

ウサミ 「……」

イタバシ 「もしエンドウが殺しなんかやらないで、15年くらい経ったらオガワになる。そう感じる」

ウサミ 「……わかりました」

イタバシ 「そうか」

ウサミ 「イタバシさん、そうやってサボってるんですよ」

イタバシ「サボってる?」

ウサミ「慣れちゃうと、ここサボるにはもってこいでもんね。人はいないし、隠れるところたくさんあるし。コンビニ遠いのが難点ですが」

イタバシ「あいな……」

ウサミ「いえ、いいんです。運動にもなりますから」

イタバシ「おまえ、オレをバカにしてるのか?」

ウサミ「とんでもない。オレもいろいろ考えましてね」

イタバシ「何を?」

ウサミ「転職のこととかですよ」

イタバシ「またそれが」

ウサミ「でね、オレもイタバシさん目指して生きてくことにしたんです」

イタバシ「オレ?」

ウサミ「はい。給料は安いけど、かといって安すぎるってわけでもない。それに、警察は潰れる心配もない。なるべく安全なところを立ちまわってれば、そう危険な目に遭うわけでもない。巡査長どまりでもいいから、安定だけを心がけて、楽しみは退職後について……よく考えたら、素晴らしい人生プランだと思います」

イタバシ「おまえから見ると、オレはそんなもんか……」

ウサミ「今後ともいろいろご指導ください」

イタバシ「ああ……」

大型車の通過音

ウサミ「……それにしても広いですよ、この団地。ほんとに全部人が住んでたなんて信じられないですよ」

イタバシ「オレたちが子供の頃は、こついう団地がどんどんできて、大人気だったんだよ。入るのにも抽選でね」

ウサミ「それが今じゃ、こんなこと」

イタバシ「行政の問題だな。将来の見通しなんかなんにもないのに、業者に金落とすことばかり考えて……」

ウサミ「家賃安くしたら入りませんか?」

イタバシ「駅からこんなに遠いのに?そのわりにろくに駐車場もない。おまけに昔の住宅基準で作ってあるから、一部屋一部屋が狭い。大画面テレビなんか置けな
いだろ」

ウサミ「防音とかもされてなさそうですね」

イタバシ「実際、ピアノ殺人事件とかもあった」

ウサミ「ピアノ殺人?」

イタバシ「こんな団地でも、高度経済成長でピアノ買えるようになって、窓開けっ放しでこれみよがしにヘッタクソなピアノをガキが弾くわけさ」

ウサミ「たまりませんね」

イタバシ「夏で暑いうえに、神経を逆撫でするピアノ。ちょっと神経症の犯人は思わず殴り込んだ」

ウサミ「で？」

イタバシ「母親と8歳と4歳のガキの3人を惨殺」

ウサミ「やつちやいましたねえ」

イタバシ「犯人も自殺を試みたが死に切れず逮捕。裁判の結果、もちろん死刑」

ウサミ「うわ、どっちも気の毒だ」

イタバシ「犯人は控訴しなかったんで、「拡大自殺」って言われた」

ウサミ「悲惨……」

イタバシ「昔と今じゃ、さらにプライバシーのあり方が変わってしまったのに、それにまったく対処できてないから、こんなところには誰も住むはずがない。セキユリティも甘々だしな」

ウサミ「どうするんですかね？」

イタバシ「民間に売却するらしいけど、まあ多分金持ちの老人目当てに、ホテル形式の老人ホームにでもするんだろ、病院つきで、駅からの送迎バス完備して……」

ウサミ「高いんでしょうね」

イタバシ「憶、いくだろうな」

ウサミ「憶……どっちにしても、オレたちには関係ないってことですね」

イタバシ「ないな」

ウサミ「イタバシさん、貯金どれくらいあります？」

イタバシ「聞くな」

大型車の通過音。

ウサミ「……なんでこんな世の中なんだろう？」

イタバシ「なんで？と疑問を持つこと自体がムダなことだ」

ウサミ「はあ……」

イタバシ「世の中はあまりにもくだらないことで成り立っている。戦争はなくならないし、犯罪もなくならない。今日、自分がしなければならぬことなんて、ものすごく限られている。それをこなしてるだけで、あつという間に時間は過ぎ去る……そして、当たり前のように毎日殺人事件が報道される。子供の頃と比べたら考えられない頻度だ。人間が人間を簡単に殺す。だから、人を殺すことに何のドラマも成立しなくなる。悲劇が成立しないんだ……」

ウサミ「いや、オレはそついうことを言いたかったんじゃないかって……」

イタバシ「おまえ、最近泣いたことあるか？」

ウサミ「え？」

イタバシ「泣きたくないか？」

ウサミ「どうかなあ……」

イタバシ「世界は泣きたがっている、とオレは思う」

ウサミ「……」

イタバシ「だが、だからといって悲観する必要もない。問題は永遠に先送りされる。時間には永遠に引き延ばされる……それだけだ」

ウサミ「あの、イタバシさん……」

イタバシ「来た……」

ウサミ「来たって?」

イタバシ「行くぞ」

ウサミ「え?」

イタバシ「おまえ、銃持ってるよな」

イタバシ、客席通路を通過して去る。

ウサミ、後を追う。

#7

音楽。

オガワ、花道から現れ、センターボックスにすわり、ケーブルを拾い上げる。

外周の壁にモニター画面が映し出される。

オガワ「朝。トースト、ソーセージ2本、アメリカンレリッシュ&タバスコ、ラズベリージャム、有機豆乳、野菜ジュース、エスプレッソ。

昼。焼きおにぎり(冷凍)、コロッケ(冷凍)、サンペレグリノ。

夜。ポトフ、パン、バター、エスプレッソ。

体重、60.2kg。体脂肪率、15.7%

クレステール5ミリグラム……」

エンドウ、オガワの背後から現れる。

エンドウ「この前と、まったく同じですね」

オガワ「今日も月曜日だから」

エンドウ「ほんとに食べたんですか、そのメニュー?」

オガワ「どうか……戻ってきたんだ」

エンドウ「助けてもらったのに、お礼もしてなかったんで。でも、どうして助けてくれたんです?」

オガワ「どうしてだろう?なんとなくだな」

エンドウ「なんとなく……」

オガワ「じゃなければ……きつと、きみのことを友だちだと思ってるんだろうな」

エンドウ「うれしいな」

オガワ「だから、もし重大な犯罪を犯してるんだったら、自首してほしいと思ったんだと思う」

エンドウ「なるほど……」

オガワ 「何やったの？」

エンドウ 「刑事から聞きませんでした？」

オガワ 「いや、聞いてない」

エンドウ 「そうですか……実はオレ、ハッカーなんです」

オガワ 「ハッカー？」

エンドウ 「ええ。で、とうとう指名手配されちゃって」

オガワ 「それでここに身を隠してたんだ」

エンドウ 「まさか。身を隠すなら、こんなところへは来ませんよ。すぐに国を出ます。

パスポートの偽造なんていくらでもできますから。海外脱出できれば、オレなんか国際指名手配になるほどの大物じゃありませんからね」

オガワ 「じゃあ、なぜ……？」

エンドウ 「実は、ここにやってきたのは偶然じゃないんです」

オガワ 「どういうこと？」

エンドウ、センターボックスにすわる。

エンドウ 「何年前かに、気分転換にクラウドの中さまよって、手当たり次第にライフログに侵入してたんですよ。のぞき見です。でも、ほとんどはつまらないもので、驚くほど同じ内容のオンパレード。みんな自分は特別な人生を歩んでいるような気分で見たいんだけど、やっけることはどれも大差ない。特別な人間なんていないんですよ。誰かは誰かのコピーで、オリジナルなんてどこにも存在しない。クラウドの中はゴミだらけ。ま、その分部屋の中が片付くなら意味があるのかもしれないけど、思ったほど面白いものじゃない。でもうやめようかな、と思ったとき、オガワさんのライフログに入り込んだんです。あ、そうだ、たまにはパスワード変えた方がいいですよ。ライフログもメールも、みんな同じで、もう何年も変えてませんよ。それじゃあ侵入者に対して「イラッシャイマセ」って言ってるようなもんです。あ、そうだ、チェスルームも同じだった」

オガワ 「……」

エンドウ 「そうそう、オガワさんのチェスの相手ですけど、気をつけた方がいいです。

オガワさんは、宅急便のオジサンをイメージしてるとか言ってたけど、本当は全然違うヤツですから」

オガワ 「知ってるのか？」

エンドウ 「ええ。ヤツは、結構有名なソーシャルエンジニア崩れでしてね……何かべつに職業も持つてるらしいって噂ですけど」

オガワ 「……」

エンドウ 「もしかしたら、もうオガワさんの銀行口座を勝手に使ってるかもしれない。

住所も電話番号も調べあげてる可能性もありますよ。もし、まだ無事でしたら、今のうちに対策をしておいたほうがいいですね」

オガワ 「……」

エンドウ「ああ、それで話を戻しますと、オレ、これで最後にしようと思って、オガワさんのライフログに侵入したんです。そうしたら……もう一日中見てました。夢中でしたね。オガワさんの人生に釘付けですよ」

オガワ「……どうして？」

エンドウ「だって、オガワさんのライフログに書かれてるの、オレのことなんですもん」
オガワ「え？」

エンドウ、立ち上がりセンターボックスの周りを回る。

エンドウ「……3歳のときに両親が離婚。父が家を去り、母はウエイトレスをして生活を支えた……で、母は昼だけでなく夜も家にいないことが多かったから、オレは家の中で一人で過ごさなければならなかった。何もかも、ほとんど自分でやる生活。もちろん料理も覚えた。簡単にできるポトフとかね」

オガワ「……」

エンドウ「小学生のとき、切手のコレクションにはまりましたよね。オレもです。一番大事にしてたのは、十歳のとき、オヤジが誕生日プレゼントにくれた「見返り美人」

オガワ「……」

エンドウ「高校で電話フリークになりました。友だちがやってたんで誘われて……知ってますよね、オガワさんもやってたんだから。電話局の交換機に不正アクセスして、いろいろイタズラする遊び。それが高じてコンピュータへ興味を持つことになったんだけど……」

オガワ「ほんとに読んだんだ……」

エンドウ「読みました。でも、オレのことですからね」

オガワ「……」

エンドウ「驚きました。誰かがオレの生活を覗いて、記録し続けてるんだと思いました」

オガワ「そんなことあるはずがない」

エンドウ「もちろん、細かいところの食い違いはありますよ。でも、ほとんどはオレの人生が焼き直されている」

オガワ「それは……」

エンドウ「それは、オガワさんがオレの人生を記録したから……ライフハッカーだったってことですよね」

オガワ「……」

エンドウ「だから、オレは確かめなくちゃと思ったんです。実際にオガワさんにお会いして、いろいろ話して、それで知る必要があるって。どうやって、オレの人生をライフログにすることができたのか？どうして、オガワさんの対象にオレが選ばれたのか？選ばれたんですよね、オレ？」

間

オガワ「……もし、僕の人生がきみの人生に似ていたとしても、それはあり得ないことじゃないだろ」

エンドウ「そうかな？」

オガワ「ついさっききみ自身が言ったように、特別な人間なんていない。誰かは誰かのコピーで、オリジナルなんてどこにも存在しない。これは真理であって、僕もきみもその例外ではない」

エンドウ「じゃあ、オレはオガワさんのコピーでオガワさんも誰かのコピーってことなんですか？」

オガワ「認めたくない気持ちはよくわかる。僕だってそうだ。誰かのコピーであるなんて堪えられない。だけど、一方でそれが真実であることも知っている。そしてそのジレンマを、僕はどうすることもできないでいる。だから、ライフログをつけている。もしかしたらムダなことかもしれないけど、歴史の中の自分とか、社会の中での自分なんて把握のしようがない。だから、自分自身と向き合っしかないんだ。他の誰でもない自分自身と」

エンドウ「誰かのコピーである自分自身とね。そのオリジナルは誰なんです？オレじゃないんですか？」

オガワ「……きみは自分自身がオリジナルであると思いたいだけじゃないのか？」

エンドウ「なんだって？」

オガワ「きみ自身がコピーであることから逃れられないから、僕をきみのコピーだと思っことで、きみ自身はオリジナルなんだ、特別なんだ、と思い込もうとしているように僕には見える」

エンドウ「なんでそんなウソをつくんだ！オレの人生をコピーしたって正直に言えばいいじゃないー」

オガワ「どうかしてる……」

エンドウ「どうかしてるのはオガワさんのほうだ……じゃあ、奥さんの話をしましょうか」

オガワ「えっ？」

エンドウ「本当はいたのに、オガワさんのライフログに出てこない、奥さんの話」

オガワ「ー！」

エンドウ「どうして削除したんです？」

オガワ「それは……」

エンドウ「あれだけの期間、奥さんの記録を残していたのに、いきなりそれを削除したのはどうしてなんです？」

オガワ「……」

エンドウ「誰かにのぞかれる危険があるから、あのままにはしておけなかったんですよね」

オガワ「違っ……」

エンドウ「違っ？何が違っんです？」

オガワ「……」

エンドウ「オガワさんが、オレのライフハッカーだったことの、決定的な証拠になるか

「じゃないんですか！そうじゃなければオガワさんも……」

オガワ「あれは……作り話だ」

エンドウ「作り話？」

オガワ「事実じゃない。僕が作った」

エンドウ「何だつて？」

オガワ「……僕が結婚していたのは事実だ。だが、きみが読んだようなことは……本当はなかった」

エンドウ「ウソだ……」

オガワ「僕が作った……作らずにはいらなかったんだ……だが、そのことに関して
は、きみにとやかく言われる筋合いじゃない。それに、もう削除したんだから……」

エンドウ「……」

オガワ「歴史は捏造しても、自分の人生は捏造してはいけない。それは、ライフログ
として間違った行為だ……それに、あんな劇的なことは、僕の人生にふさわ
しくない……」

エンドウ「……いい加減にしてくださいよ」

オガワ「これが真相だ……それから、もう僕のライフログをのぞくのはやめてくれ。
きみはきみの人生を生きるべきだ。僕ときみは違う人間なんだから」

エンドウ「ウソだ！」

オガワ「ウソじゃない」

エンドウ「オガワさん、巻き込まれたくないだけなんです」

オガワ「……」

エンドウ「オレが逮捕されたら、オガワさんのライフログの話もするかもしれない。そ
うしたら、オガワさんもまずいことになるかもしれないからね」

オガワ「……好きにすればいい。僕には困るようなことは何も無いんだから」

エンドウ「黙れ！」

ストロボが点滅する。

オガワ「……ちょっと見てくる。念のために隠れたほうがいいんじゃないか？」

エンドウ「……」

オガワ、花道から出て行く。

エンドウ、ひとり残る。

エンドウ「朝。トースト、ソーセイジ2本、アメリカンレリッシュ&タバスコ、ラズベ
リージャム、有機豆乳、野菜ジュース、エスプレッソ。

昼。焼きおにぎり（冷凍）、コロツケ（冷凍）、サンペレグリーノ。

夜。ポトフ、パン、バター、エスプレッソ。

体重、60.2kg。体脂肪率、15.7%

クレストール5ミリグラム……」

音楽が聞こえてくる。

外周の壁にエンドウのシルエットが浮かび上がる。

何人ものエンドウのコピーのようなシルエット。

エンドウ、センターボックスにすわり込み、体を丸める。

シルエットが一つになっていく。

花道から、銃を構えたイタバシが現れる。

音楽が大きくなる。

イタバシ、エンドウを撃つ。

銃声のかわりに、邪悪なデジタルノイズが大音量で響き渡り、音楽もかき消される。

エンドウ、倒れる。

イタバシ、エンドウに近寄り仰向けにし、エンドウの手にウサミの銃を握らせる。

オガワが走りこんでくる。

イタバシとオガワ、対峙する。

ウサミ、遅れて走りこんできて、撃たれたエンドウを確認する。

邪悪なデジタルノイズが消える。

イタバシ「正当防衛です」

オガワ「正当防衛？」

イタバシ「ほら、銃を握ってる」

オガワ「え？」

イタバシ「さつき、こいつ（ウサミ）が襲われて、奪われたんですよ。な」

ウサミ「はい……」

イタバシ「こいつ（エンドウ）は殺人犯。指名手配されてたんです。いずれにしても死

刑だったから」

オガワ「……」

イタバシ「（ウサミに）応援要請。そのまま外で待機」

ウサミ「でも……」

イタバシ「オレはここで現状保存してる」

ウサミ「こちら（オガワ）は？」

イタバシ「一緒にいてもらおう。目撃者ですからね」

オガワ「……」

ウサミ「わかりました……」

ウサミ、出て行く。

イタバシ、エンドウが握っている銃を踏んでいる。

イタバシ「なんで、こんなヤツかくまってたんです？」

オガワ「……」

イタバシ「同病相哀れむってどこかな？」

オガワ「……」

イタバシ「でもね、こいつらみたいな病原菌は退治しないと社会のためによくならない。だから、あまり悲しんだりしないように」

オガワ「……」

イタバシ「それとも、こいつが死ぬのを見て、少しは悲しみがわかったりしましたかな？」

オガワ「え？」

イタバシ「実はね、私、オガワさんのことはよく知ってるんじゃないかな、と思うんですよ」

オガワ「……どういうことだ？」

イタバシ「オガワさん、ネットでチェスやるでしょ」

オガワ「……」

イタバシ「私もね、ちょっとたしなむんです」

オガワ「……」

イタバシ「で、私、ちょっと対戦相手のことが知りたくてね、いろいろ手を尽くして調べたりするんです。別に、私は特にコンピュータに詳しいわけじゃないんですけど。職業柄、聞き出したり推理したりするのはわりと得意で。ネットで何回もチャットなんかしながらチェスをやっていると、意外とガードが甘くなって、いろいろな情報交換するようになるじゃないですか。で、うまく話を持って行くと、直接聞き出すことはできないけど、電話番号とかわかっちゃうんですよね。みなさん、結構いろんなところに簡単に登録したりするでしょ。Facebookに全部載せちゃったりする人とか……で、それを元に調べていくと、対戦相手を特定できますから」

オガワ「まさか……」

イタバシ「ああ、せっかく情報いただいたのに、実はデイトレードはやってないんです。仕事があるもんで。それに、博打はちょっと苦手です」

オガワ「……」

イタバシ「ま、今後ともよろしくお願いしますよ。デジタルドラッグの情報は流しますから」

オガワ「なぜこんなことを……」

イタバシ「行動に理由がなくちゃいけませんか？まだ、私の教えがわかってないようですよ」

オガワ「あなた……」

イタバシ「考えるな、感じるよ！」

オガワ「……」

イタバシ、エンドウの口元に手をかざし、呼吸を確かめる。

エンドウ、呼吸をしていない。

イタバシ、オガワに近づく。

イタバシ「ちょっとそれ（センスカム）見せていただけませんか？」
オガワ「……」

イタバシ、センスカムをオガワの首から外す。
オガワ、されるがまま。

イタバシ「正当防衛だったところは、撮れてないですね」

オガワ「……」

イタバシ「残念だな、強力な証拠になるのにな」

オガワ「……」

イタバシ「あ、そうだ……これ（銃）、オガワさん、こういうの触ったことないでしょ」

オガワ「……」

イタバシ「どうです？ちょっと握ってみますか？」

デジタルノイズ。

イタバシ、オガワに銃を握らせ、背中を向ける。

オガワ、イタバシへ銃口を向ける。

イタバシ、振り返る。

イタバシ「お、そうきましたか。少しは感じられるようになったみたいじゃないですか」

オガワ「黙れ」

イタバシ「やってごらんなさい。考えないで。いやあ、来た甲斐があったな。やっぱり

こういうことは直接指導に限る」

オガワ「死ぬのが恐くないのか？」

イタバシ「死ぬ？誰が？どうせできやしませんよ。それに銃を撃つには訓練が必要だ。

せいぜい、自分の足を撃たないように気をつけてくださいよ」

オガワ「黙れ」

イタバシ「あ、あと引き金引いたら、私に当たっても当たらなくても、殺人未遂の現行犯で逮捕しますよ。それとも正当防衛しちゃおうかな。ま、ここまでなら許してあげてもいいけど」

オガワ「黙れ！」

オガワ、引き金を引く。

弾丸は出ない。

デジタルノイズが消える。

イタバシ「バカだなあ……出るわけないでしょ。言い忘れてたけど、私は射撃に自信があるんで、いつも弾丸は1発しか入れてないんですよ。さ、授業はおしまい。

一応、これ（センスカム）はお預かりしますよ。オガワさんが、妙な気を起

「こさないようにね。一部始終が写ってるはずだから」

イタバシ、センターボックスに腰掛ける。

銃声。

床に横たわったまま、エンドウがイタバシに銃を向けている。

イタバシ、床に倒れる。

ウサミ、花道から駆け込んでくる。

エンドウ、上半身を起こし、銃口をウサミに向ける。

ウサミ、それを見て、再び逃げ出す。

エンドウ、イタバシに近づき、トドメをさしてから、センターボックスにすわる。

エンドウ「(イタバシを見て)……当然の報いだ……でも、うれしかったなあ、オガワさんが引き金を引いてくれたときは……」

オガワ「……」

オガワ、エンドウを見つめている。

エンドウ「さっきの話を続きしてもいいですか……オレね、結婚してたんですよ。結婚生活はたった6ヶ月。ずっと一緒にいたいと思ったけど、向こうには苦痛だったみたいで……で、オレはあいつを自由にしてやった……そのほうが彼女のためだし、オレはあいつを愛しているから、それは仕方ないことだったんだ……わかりますよね？オガワさんがライフログから削除したあの部分ですよ……オレは削除される前に読んでます……でも、最後まで書いたか書かれてなかった……で、次に見たときには、あの部分は全部削除されていた……だから、ここに来た……」

オガワ「……」

エンドウ、最後の力を振り絞って立ち上がる。

エンドウ「オガワさんなら教えてくれると思ったんですよ……オレはどうすればいいの
か……だってオレの人生を記録してるんだから……」

オガワ「……」

エンドウ「でも、こんなオチだとはね……」

エンドウ、センターボックスに再び崩れ落ちる。

オガワ、エンドウに駆け寄る。

オガワ「さっき逃げたヤツが、すぐに誰か連れてくるから……」

エンドウ「でしょうね……」

オガワ「横になったほうが……」

エンドウ「このままで……」
オガワ「でも……ちょっと待ってる」

オガワ、花道へ向かう。

エンドウ「オガワさん！」

オガワ「……え？」

エンドウ「お願いがあるんです……」

オガワ「なに？」

エンドウ「オレを撃てます？」

オガワ「え……」

エンドウ「妻を殺して刑事を殺したんだ……たとえここで死ななかったとしても、多分、死刑でしょ……だから……」

オガワ「……」

エンドウ「戦場だね……」

オガワ「え？」

エンドウ「戦場では……戦友が連れて逃げられないくらいの傷を負ったら、無傷のほうがいい殺してやるのが友情の証なんですよ……置き去りにして、敵になぶり殺しにされないようにね……」

オガワ「……」

エンドウ「やってくれますか？」

音楽。

エンドウ、銃を拾い上げ、オガワに差し出す。

オガワ、意を決してエンドウに近づき、銃をつかむ。

エンドウ「ありがとう……」

エンドウ、そのまま息絶える。

オガワ、銃を手にしたまま、センターボックスにすわり込む。
涙が流れている。

暗転。

#エピソード

円形部分の中央のオブジェの横に、オガワが立っている。

オガワ、半透明のゴミ袋を持って上空を見上げている。

オガワの背後に、アマリが立っている。

アマリ、オガワの様子を見つめている。

オガワ、センターボックスにすわり、頭からゴミ袋を被る。

電気椅子にすわらせられた死刑囚のようなオガワ。
アマリが近づき、センターボックスに接続されていたケーブルを引き抜く。
音楽、カットアウト。
外周の壁に、オガワのシルエットがいくつも浮かび上る。
街ノイズが聞こえてくる。
アマリ、花道へ去る。
オガワのシルエットの間でケーブルが揺れている。
やがて暗闇に消える。
暗転。

「以上」

鈴木勝秀 (suzukatz.)